Japanese Journal of Applied Psychology
2002, Vol.28. No.1, 1-16

総　説

応用心理学研究の方法と対象

坂　野　　登*,**

Method and Object of Applied Psychological Researches

Noboru SAKANO *,**

The fundamentals of applied psychology are general psychology and characterology or personality assessment as a special aspect of the theory of human behavior (Eysenck, Arnold and Meili, Encyclopedia of psychology, 1972). Long debates in the history of psychology on the method of psychology, i.e., nomothetic vs. idiographic method or natural-scientific vs. cultural-scientific psychology were regarded to be closely related also to the methodological problems of applied psychology. General psychology as one aspect of the fundamentals of applied psychology implies emphasis on general principles (nomothetic method) as opposed to individual variation. Personality assessment is, on the other hand, closely related to idiographic method.

In general psychology, population and samples under investigation should be regarded as aggregates of responses of each of the subjects. In differential psychology where the personality assessment occupies a part, the population and samples should be regarded as aggregates of individual subjects. The number of samples does not play a role in differentiating the nomothetic from the idiographic method.

It was regarded in American and Japanese psychology that type theories of characterology had been replaced by personality trait ones. However, in the present paper the need for characterological view in differential method was stressed.

In the final section, two research examples from the Japanese Journal of Applied Psychology were presented to show how fundamental and applied researches in applied psychology should be conducted.

key words: definition of applied psychology, general principle vs. individual variations, aggregates of responses vs. aggregates of individual subjects, type vs. trait theory

本論は次のような問題意識から出発している。応用心理学とはどのような学問かという問は，応用心理学を自覚的に研究している研究者にとっては自明の事柄であるように一見思えるが，それほど明確なものではなくて，それぞれの研究者独自の視点があり得るというあいまいな合意が，応用心理学者の間に成立しているように思える。ここでいう独自の視点というものが，当該の研究者の専門領域と密接に

* 神戸親和女子大学文学部人間科学科
Department of Human Sciences, Faculty of Literature, Kobe Shinwa Women's University

** 本論文の一部分は，2000年9月9，10日神戸親和女子大学で開催された，日本応用心理学会第67回大会第1日目9日における会長報告「応用心理学研究における被験者の選択をめぐる諸問題」を整理まとめ直し，「心理学研究における標本と母集団の選択をめぐる諸問題」として発表したもの（坂野，2001）をもとにしている。

関連しているであろうことは容易に想像できるが，専門領域の違いに帰するだけでは，応用心理学の定義のあいまいさは解決しない。

本論ではまず日本応用心理学会における定義の変遷を簡単に振り返り，ついで心理学関連の辞典のなかでの定義を検討することのなかから，定義をめぐる現状を把握し，最後に，問題を解決するための一つの道は，応用心理学が研究対象とする人々をどのような存在として位置づけているかという問題のなかにあることを示すことにしたい。このような方向づけは，2000 年に，神戸親和女子大学で開催された日本応用心理学会第 67 回大会にて，会長報告「応用心理学研究における被験者の選択をめぐる諸問題」を行ったが，その延長線上に位置づけされるものである。

1. 日本応用心理学会における定義

まずは日本応用心理学会の会則における変遷を見ることにしよう。現行会則である日本応用心理学会会則（1997 年 8 月 30 日から実施）の第 2 条には，応用心理学の目的が“本会は心理学およびこれに基づく学術技芸の応用発達を促進し，隣接諸科学との交流を図り，もって我が国文化の向上発展に貢献することを目的とする”と述べられている。このような定義は 1951 年 11 月 23 日から実施の会則とまったく同一のものである。

日本で応用心理学会の芽生えが見られたのは，関西では 1927 年，関東では 1931 年頃であるが，その内規には応用心理学の定義に関する条項は見あたらない。応用心理学の目的に関する定義は，應用心理學會暫定規則（1940 年 11 月）で初めて明確に述べられている。これは戦時下という時勢の要求に適応するため，日本心理學會との併合統一という改組を目論み，会規の変更が急きょ議せられたことによる。そこでは“本會ハ心理學ノ應用的研究ニ依リ日本國民ノ生活及文化ノ発展ヲ圖ルヲ目的トス”と定義されている。日本心理學會との違いを明確に示したいという当時のもくろみを察知することができるようである。

應用心理學會と日本心理學會とは 1941 年に，心理學會という一つの団体としてまとめられることになるが，その際心理學會會則第三條では，“本會ハ心理學及之ニ基ク學藝技術ノ進歩發達ヲ圖リ，我ガ國文化ノ向上ト國力ノ増進トニ貢獻スルヲ以テ目的トス”とし，“應用的研究”は“進歩發達”というより幅広い定義に置き換えられている。この會則でうたわれている“進歩發達を図ること”という定義は，後の日本応用心理学会則ではこの箇所が“応用発達を促進”と変わり初期の定義にもどることになる。

これらの資料はすべて，応用心理学研究別冊「日本応用心理学会史，1998」に依ったが，応用心理学の定義をめぐるこれらの変遷はおおむね，当時の時代的背景を考えると理解できることである。しかし 1941 年心理學會會則にある「学藝技術」から，1946 年の應用心理學會暫定會則での「學術技藝」へと定義が変更され今日に至っていることについてはその理由は定かではない。またいずれの定義にせよ，その意味するところの由来は不明のままである。ちなみに「学芸」とは“学問と芸術。学問と技芸”の意であり，「技芸」とは“美術・工芸方面の技術”の意とある（新国語事典，角川書店，1981）。

これまでなぜ，日本応用心理学会における応用心理学の定義の変遷を問題にしたかといえば，応用心理学が，心理学の応用発達にとどまるのか，心理学の進歩発達というより大きな枠組みのなかに位置づけされるのか，歴史的経過として片付けられない明確にすべき問題と間接的に関係しているからである。

2. 応用心理学の事典・辞典的定義

次に日本の心理学関連の事典，辞典での応用心理学の定義を見てみよう。そこでの定義が，日本応用心理学会での定義と直接的な関わりがあるかないかは明らかではないが，日本における心理学事典，辞典での取り扱いには様々なものがある。最大の索引事項を含む平凡社の心理学事典（1957）では，矢田部が心理学の項目を担当しているが，心理学の研究分野のなかには応用心理学の名はなく，また索引項目にも応用心理学の名称はない。同じく平凡社の新版心理学事典（1981）では相良が心理学の項目を担当しているが，そのなかにも応用心理学の名前はなく，また索引項目にもでてこない。矢田部の流れをくむと考えられる，園原・柿崎・本吉監修の心理学辞典（ミネルバ書房）にも応用心理学の項目はない。

様々な定義　応用心理学が事項として取り上げられている辞典には，応用心理学を限定的に定義づけようとするものと，より積極的に広く定義づけようとするものとに大別されるようである。前者の例として，教育心理学小辞典（有斐閣, 1991）で三宅は“一般に基礎心理学に対していわれることが多”く，“実験心理学のような基礎的分野から得られた知識・理論を現実の問題にかかわる心理学的研究に適用するということであり，医学における基礎医学と臨床医学の関係と同じであろう”とする。しかし教育心理学や発達心理学などを応用的と片付けてしまうのは正しくなく，独自の体系を構築しているのであって，“このことからもわかるように，今日，応用心理学という言葉はそれほど用いられなくなってきている”としている。

他方心理学小辞典（有斐閣, 1978）で滝沢は，“従来は心理学の基礎分野に対するものと考えられた”が，“現在の応用心理学は基礎的研究の応用というよりは独自の科学として発展している。アメリカにおいてとくに研究が盛んである”と結んでいる。滝沢の定義を見ると，教育心理学や臨床心理学は応用心理学と密接な関係にあることになる。

その分担執筆者は明らかではないが，北村（監）の心理学小辞典（協同出版, 1978）では，応用心理学の消極的あるいは積極的意義が強調された後に，“一般心理学の方法や成果の機械的応用によっては解明がむずかし”く，“行動の一般法則を基礎としつつ，人間性やその個別性，独自性の理解を含む多様な接近法が要請される”とある。要するに応用心理学と一般心理学の有機的な相互影響的な関係が強調されるのである。

臨床心理学辞典（八千代出版, 1999）で佐々木は，応用心理学のいわば創設者である Münsterberg, H.（1863–1916）が，応用心理学を心理学において発展した方法と技術の実践的応用であるとしたことをまず紹介し，応用心理学は“これまで心理学の基礎分野に対する応用分野として考えられてきた”とする。しかし“実際問題の解明には他の諸科学の知見が必要となることも多く，心理学の基礎的研究の方法や成果がそのまま適用されているわけではない。現在では，応用心理学は，基礎の応用を行う分野ではなくなっているのである”と結んでいる。

包括的定義　以上の諸定義のなかでは，後の三者が応用心理学の独自性を積極的に認めたものとして一括できるのであるが，その独自性の根拠をどこに求めているかは，辞典のなかでの短い記述であることもあって明確でない。ここで応用心理学について明確な定義を行い，またその根拠をこれまた明確に示しているのは，Eysenck, H. J., Arnold, W. J. & Melli, R. 編集の心理学百科事典（Encyclopedia of Psychology, Fontana, 1975，総 1186 ページ（オリジナル版, Lexikon der Psychologie, Herder, 1971, 総 818 ページ））のなかでの Arnold の 5 ページ（ドイツ語版 6 ページ）にわたる紹介である。

それによると応用心理学とは，“心理学的知見と研究の，生活のニーズより生じている課題への適用（application）である（英語版）。”“応用心理学は生活のニーズより生じている心理学に対する課題に関わっている（ドイツ語版）。”“応用心理学の基礎（fundamentals, Grundlagen）は，一般心理学と人間行動理論の特殊な側面としての性格学（characterology, Charakterologie）すなわちパーソナリティ・アセスメントである（パーソナリティ・アセスメントの語は英語版に追加された部分）。応用心理学はしたがって，科学的知識の有用で実際的な適用である。…… 科学的心理学は上達した方法論的接近を行っており，分類の適切なモデルと検証可能な結果の樹立と関わっているが，他方「前科学的（pre-scientific）心理学」はその対象に対してもっぱら直観的として分類されるような方法で接近する”。

一般心理学とは　この心理学百科事典での「応用心理学」の定義で注目されるのは，ともすれば応用心理学と対置される一般心理学（general psychology）が，応用心理学の基礎として明確に位置づけされているということである。ちなみに同事典の一般心理学の項目には，“個人的変異（差異心理学），種的違い（比較心理学），社会 — 文化的要因（社会心理学）と対照的に，一般原則を強調する場合に用いられる”とある。先にあげた応用心理学の定義のなかにでてきた性格学とは，ヨーロッパ圏特にドイツ語圏独特の概念であるが，ここではとりあえずパーソナリティアセスメントと理解し，くわしくは後で類型論についての考察のなかでその意味を検討することにしたい。しかしここで注目したいのは，性格学が差異心理学のなかに含まれる概念であるので，応用心理学とは一般心理学と，それと対比される差

異心理学が含まれるような，幅広い領域を包含する概念であり，したがってそれらを結びつける理論的，方法論的考察が必要とされるということである。

ところで心理学百科事典の一般心理学の定義では，一般心理学の定義についての歴史的経過に触れ，Allport (1937) が一般心理学の価値について，非常に厳しい批判を行ったことを紹介している。Allport にとっては，“一般化された人のこころとは全く不可解なものであり，こころのもっとも本質的特徴を欠いているのである。”しかし Allport は後に，人格心理学（1961，日本語訳，1968）のなかではより柔軟な態度をとっている。かれは，これまで対立的にとらえられてきた，法則定立的（nomothetic）方法と個性記述的（idiographic）方法とが，パーソナリティ心理学に用いられる三つの基準のなかに包括的に理解できることを示して，問題解決への道を見いだそうとした。

Chaplin の定義　Chaplin の心理学辞典（1968）の応用心理学の項は，より実用的な定義として示唆的である。“応用心理学とは，実用的な目的（practical end）のために，心理学の原理と発見を利用する心理学の分野である。応用心理学者は理論心理学から原理と発見を「借り」るか，あるいは独自の研究プログラムを行うであろう。実用的な領域での発見は心理学的知識の一般的な蓄積に付け加えられる。このようにして応用心理学と理論心理学とは相補的であり，相互に貢献し合うのである”。このような定義をより具体化して明確に示したものが，心理学百科事典であるということができよう。

応用心理学のいずれの定義に従うとしても，ある時には法則定立的対個性記述的，またある時には自然科学的方法対精神科学的方法という名で呼ばれてきた，哲学上そして心理学上の議論と応用心理学は無関係ではなく，むしろその議論を深めていくことのなかに，応用心理学についての正しい理解への道があるとする，本論の趣旨に添って問題を展開して行くことにする。

3. 法則定立的，自然科学的心理学　対　個性記述的，精神科学

法則定立的方法と個性記述的方法　法則定立的，個性記述的の語を明確な形で提示したのは新カント派に属するドイツの Windelband (1904) であるが，古くは中世のスコラ学者までさかのぼることができるとオールポートは指摘している。この二つの区分は 19 世紀の終わり頃の，自然科学と文化科学，或いは自然科学と精神科学とを対置させて区別しようとした哲学の中での試みと関係している。Windelband をはじめとするドイツの哲学者たちは，自然科学では抽象と一般化という方法を通して，対象の中に含まれている価値を抽象し，一般的な関係を法則として定めるのに対して，文化科学的な方法では，価値という関係の中で事物の個性を記述するところに特徴があるとした。

説明的方法と了解的方法　科学対独自性のこのディレンマ（オールポート，1968）を心理学のなかに持ち込んだのがドイツの哲学者で心理学者の Dilthey (1883) であった。Dilthey が提唱し，Spranger (1916) によって引き継がれた生の哲学は，心理学では了解心理学として知られている。生の哲学では「生成し流動する生・生命」をそれ以上遡ることのできない根本的現実と考え，生それ自体を直接体験によって了解すべきであるとされる。彼は 19 世紀後半の心理学は，自然科学の影響を受けて，精神現象を一定の要素に還元し，その要素を構成することによって精神現象を説明しよう（erklären）とする説明心理学であると考え，この方法によっては真の精神現象はとらえられないと考えた。

生きた連関としての精神現象をとらえるためには了解（verstehen）という方法を用いなければならない。彼によれば，“自然をわれわれは説明するが，精神生活はこれを了解する”のである。了解的方法は，生きた全体的連関を確実に記述し分析して，その構造を明らかにすることを目指すが，その基礎には直接所与としての精神的連関の直観的了解がある。またこの直観的了解が可能なのは，一般的な人間性というものが共通して各人に存在するからであって，他人の体験を言語や身振りなどの記号を通して追体験することによって行われるという。

説明的方法と了解的方法の間のディレンマ　しかし現実には説明的方法と了解的方法とを峻別することは困難である。Freud は精神分析を客観科学たらしめようとした反面，実際的な治療を重視した。Freud のもつこの両面性について，河合（1975）は次のように述べている。“この Freud 自身の矛盾性に対して，K. Jaspers がなした批判はたしかに鋭い

面をついている。Jaspers の批判は衆知のごとく，Freud が意味的連関と，因果的連関を混同したというのにある。つまり，何らかの心の現象の意味が「わかる」というのは了解による方法である。これに対して，心の現象の原因が脳の外傷や，外的な刺激などのよって因果的に「わかる」というのは，因果的説明によっているのである。それに対して，Freud が心の現象を，意識ということに無意識ということまで加えて，因果的に説明しようとするのは，了解的方法と説明的方法を混同しているというのである（p.209）”。

脳モデルによる坂野の批判　坂野（1986, 1990）は Dilthey の了解心理学の立場を，脳のはたらきとの関連から次のように批判した。Dilthey らのいう了解とは直観的で無意識的な過程であり，何らの加工も経ていないあるがままの姿を理解する過程であるように見えるとはしても，それは意識的あるいは無意識的な説明の過程との相互作用の結果，再編成を経て研ぎ澄まされたものであると考えなければならない。説明の過程も了解の過程と無関係に存在することはあり得ない。確かに了解が Chaplin（1968）の心理学事典に述べられているように，あっそうかというように比較的短時間で起こる，“意味を把握する（apprehending）過程”であるのに対して，“ある現象を明らかにする先行条件の発見である”とされる説明には時間がかかるというように，現象的には区別されることの多いものである。

ここで坂野（1990）の脳モデルに従い，了解は大脳皮質後半部の感覚連合野における事象を同時的に総合し平面化するはたらきであり，説明は前頭葉の，事象を系列的に展開し直線化するはたらきであると考えるならば，了解と説明とは相互に背反的で相容れない過程ではなく，相互作用し合う過程でありまた同時に存在し得る過程であることは明らかとなるであろう。また後に坂野（1997）は，思考における分析的な処理には，まず右半球での素早い短期間の直観的で全体的な処理と，左半球でのゆっくりした言語的で焦点的な処理の双方が含まれる二重の過程が存在することを，文献的検討を通して考察している。

ここで問題を一般的考察するならば，自然科学的アプローチと精神科学的アプローチとは，相互に対立矛盾する方法ではなく，共存的関係にあるということである。一方が他方を排除するという関係にはない。しかしそれらの関係がより具体的にどのような場面で出現するかについて，検討していく必要があるだろう。心理学における自然科学的アプローチと精神科学的アプローチは，いずれも人を対象にしたものであるとはいっても，一個人のなかの何を問題にするのかという点で異なっている。これを対象者のとらえ方の問題として，大きくとらえることができるようである。このような観点に沿って論議を展開していきたい。

ただここで注意すべきことは，自然科学的アプローチは法則定立的方向と重なり合う部分が多いが，他方，精神科学的アプローチでいう了解的方法は個性記述的方法のなかに含まれる概念であるということである。精神病理学者の Jaspers（1913）が，精神分裂病の精神症状や経過は了解という手続きを通して記述していくことが不可能であるために，彼が現象学的記述と呼んだ方法でありのまま記述していこうとしたことはよく知られた事実である。個性記述的方法のなかには，了解的方法や現象学的方法などの他に，法則定立的方法によって導き出されたパーソナリティ・アセスメント的方法も含まれるのである。

価値的視点の問題　次に個性記述的アプローチあるいは精神科学的アプローチを，法則定立的アプローチあるいは自然科学的アプローチから区別する理由ともなっている，学問体系のなかに含まれる価値観の問題を検討することにする。古くは矢田部（1950）は「心理学序説」のなかで，“物理學や生理學や，本書で取扱つた一般心理學の如きに於いては，價値的視點は一と先づ括弧に入れてできる限り中性的な立場が要求される。然るに所謂應用學や臨床學に於いてはそれらはむしろ常に價値的視點によって導かれなければならないのである（p.436）”としている。これが日本の心理学者たちに暗黙のうちにもたれている立場であるように思える。

ここで話を元に戻すと，Dilthey が直接的な精神的連関の把握を目的としていたのに対して，Spranger は意味連関，価値連関のなかでとらえようとした点が注目される。そのためには，個人的な直接的な追体験では不十分であって，個人の主観的価値体験，及び文化財という精神生活の形成物として存在する客観的価値構成物の間に，意味連関が成り立つ必要

があるとする。人間自身のなかには本性的に志向性，あるいは価値方向というものが存在していて，それらの成果として芸術，宗教，科学的，社会的思想などがつくり出されるのである。人間自身のなかに本性的に価値志向性があるので，心理学は当然価値の問題を扱う学問であることになる。

一般心理学における価値観　応用心理学が“生活のニーズより生じている心理学に対する課題”に応えるものであるだけに，この価値の問題は特に避けて通れない問題である。それでは応用心理学の基礎である一般心理学における価値観とはどのようなものであるか。一般心理学は事実そのものを研究するので価値をそのなかから排除しなければならないという議論がある。このような考えがまた，価値の追求と関係した個性記述的アプローチを法則定立的アプローチから区別する根拠ともなっている。しかし坂野がニューサイエンスを批判する際（坂野, 1986）に，あるいは教育心理学における同様の課題について指摘したように（坂野, 1988），法則定立的アプローチにも厳然として価値観が存在するのである。科学史家のトーマス・クーン（1971）がいうように，人文・社会科学者のみならず，自然科学者の集団にも，“ある集団の成員によって共通して持たれる信念，価値，テクニックなどの全体的構成”であるパラダイム（広義の）が存在するのである。

本論では，限られた範囲ではあるが，応用心理学研究と結びついた研究パラダイム（狭義の）について，批判的に検討してみたい。

4.　対象者のとらえ方

Dilthey のいう自然科学的な説明は，一般心理学の方法に通じるものと一般にされているが，オールポート（1968）は一般心理学が用いる普遍的基準，社会文化科学が用いる集団的基準，そして個人力学が用いる個人的基準の三者からパーソナリティ心理学が構成されていることを示し，科学対独自性のディレンマを解決しようとした。つまり“パーソナリティの心理学とは，全く法則定立的でもなければ，全く個性記述的でもない。それは両極間の平衡を求める（オールポート, 1968, p.24）”ものである。

法則定立的方法と個性記述的方法はまた，そこで問題とされる人間像の違いとして理解されることが多い。前者が一般的法則性のなかで抽象化された人間像を問題とするのに対して，後者では臨床心理学で問題とされる，いまそこにいる生身の現実的人間が問題になるといわれる。つまり法則定立的な研究では，不特定多数，つまり無作為抽出された対象者から得られた結論であるのに対して，個性記述的は研究では特定の，目前の個人が問題とされるのだ，という見解が一般的である。

無（三）人称と二人称の心理学　たとえば村上（1974）は，心理学研究法としての「臨床診断」を述べるなかで，Wundt 以前の心理学を一人称の心理学，Wundt 以降の，伝統的な，行動科学としての心理学の方法論を三人称の心理学，“世界を共に生きる共存在として「暖かい眼」でとらえる（p.2）”人間への臨床的接近を二人称の心理学と呼び，特に三人称の心理学とは明確に区別している。荻野（1975）は同じ本の「現象学的方法」の項をのべるなかで，“自然科学的方法による心理学が，とりわけ無人称の人間を対象にするにふさわしいとすると，現象学的心理学は，方法論的にも理念的にも「なんじ，きみ（du）と呼びかけ合う人間同士の交わりの状況を本格的に解明していくにふさわしいのである。この意味において，少なくともこれからの本格的な現象学的心理学は，「二人称の心理学」と呼んでもさしつかえないと思う（p.161）”と述べている。

このような立場は，臨床心理学者にある程度共有されていると考えてよいだろう。たとえば田畑（1975）が「心理学研究法 — 方法論）のなかで「心理療法」について論じるなかで，心理療法についての佐治（1968）の定義を引用してまとめているように，心理療法は“相手と共にある場面に成立する行為（p.179）”であるとされるのである。明確には述べられてはいないとしても，村上や田畑の論述には現象学的方法への共感がうかがえるようである。

他方河合（1975）は前掲書の「精神分析的方法」のなかで，つぎのような注目すべき発言を行っている。つまり分析者と被分析者の人間関係において，“治療者は，現象のなかに参加するものでありながら，一方では観察者でなければならない。心理療法には，このような矛盾が存在し，その矛盾をそのまま持ち続けようとするところにこそ，精神分析の方法論的な特徴があると言えるかも知れない（p.213）”。河合のこの言は，臨床心理学の立場が，いわゆる二人称と三人称の心理学という矛盾のなか

に存在するという点で注目すべきものである。この論点については，本論のなかでは後で触れることにする。

研究対象者の個体数　ここで観点を，はじめに提示した，対象者が不特定多数か特定の人かという問題にかえしてみると，前述の心理学百科事典の一般心理学の項には，両者の関係についての興味深い記述が行われていることが注目される。“法則定立性（一般法則の発見に関わる）と個性記述性（単一の出来事あるいは特殊な個人が関わる）の区別は，一般心理学との関連で指摘することができる。ここで興味深いのは，両者を区別する基準として研究対象の個体数の大きさは必要ないという事実である。このことはとくに，N=1 の個体数を取り扱う際に明白である。”

さらには，Ebbinghaus の有名な記銘と忘却に関する実験が一名の被験者を対象にしたものであり，そこから記憶の一般原理が導き出されていること，また Freud の夢に関する一般原理がまずはかれ自身のデータからきていること，そして Luria の「偉大な記憶力の物語（ルリヤ, 1983）」が個性記述的であるにとどまらず，記憶の保持と忘却に一般心理学にとって大きな貢献をしたと述べている。

この心理学百科事典では，一名のデータから一般原理を導き出す理論的根拠についてはそれ以上述べられていない。ここで理論的に重要なのは，法則定立的研究と個性記述的研究において想定されている母集団と標本について，暗黙裏に合意を得ているように見える考えについて，反省的に考察することであるように思える。またこのような考察の方向は，本論の最初に指摘した応用心理学の定義にまつわる諸問題を整理する上で有用であるという認識の上に立つものである。このようなわけで，本論の後半では，心理学研究における対象者の選択にまつわる諸問題（坂野, 2001）を補う形で，議論を展開していくことにする。

5.　実験法と差異法

両者の共通点と相異点　一般心理学あるいはそれと対比される差異心理学では，推計統計的手法により結果をまとめ，結論を導きだすという方法をとることが多い（記述統計学と推計統計学の違いについては，（大村, 2000）を参照のこと）。一般心理学では法則定立的方法を用いるのが一般的であるが，差異心理学においても知能テストで示されるように同じく法則定立的方法によることが多い。若井（1991）は，教育心理学小辞典「差異心理学」の項のなかで，“法則定立的アプローチとともに個性記述的アプローチが不可欠な心理学的研究の分野にあっては，差異心理学的観点や方法論はきわめて大切である”と述べている。この表現からうかがえることは，差異心理学的観点は，法則定立的アプローチと個性記述的アプローチの双方を用いうるということである。

しかし後で述べるように，差異心理学で用いる法則定立的アプローチと，一般心理学で中心的な位置を占める実験心理学で用いる法則定立的アプローチとで想定する母集団や標本の概念は異なっている。つまり一般心理学と差異心理学をその基礎として包含する応用心理学では，標本あるいは母集団についての二つの異なった概念が用いられているということである。それでは一般心理学における法則定立的アプローチとその対極であるとされる個性記述的アプローチでは母集団や標本の概念はどう違うのであるか，これが本論で展開したい論点の一つである。結論を先に述べるならば，個性記述的アプローチでは確かに統計的分析が行われることは少ないが，Ebbinghaus の記憶研究で用いられた単一事例の場合と共通の考えを基に，母集団や標本の性質を考えなければならないということである。

反応の集合か個体の集合か　一般的に法則定立的アプローチでは，標本についての統計的検定の結果から母集団の特徴を推定するという方法をとっている。しかし一般心理学を代表する実験法的アプローチと差異法的アプローチでの，標本の考え方の違いについては，数多くある心理学関連の推計統計学の参考書には述べられておらず，標本の抽出は「無作為でなければならない」とされているにすぎない（たとえば岩原, 1967）。牧野（1973）は「心理学研究法 — 実験の計画」の中で，心理学研究における母集団想定の型として，差異法においては被験個体が標本で個体の集合が母集団であるが，実験法では被験個体の個々の反応が標本で反応の集合が母集団であると明確に区別している。“したがって，前者の場合には，被験個体が無作為に抽出されることが必要であるが，後者の場合には，抽出されるのは反

応であって，被験個体が無作為に抽出される必要はない（牧野, 1973, p.11)”。これが，“実験的方法においては，無作為に抽出された個体についてではなく，そのときに都合のよい被験者，たまたま入手した動物が，被験個体として用いられることが多い(牧野, 1973, p.11)”ことが是とされる理由となる。

さらには，“また，統制群法などにおいて，実験群と統制群との結果が比較されるような場合には，実験群・統制群のそれぞれを構成するものは個体であっても，個体という面は捨象されて，実験条件のもとにおける反応と統制条件のもとにおける反応とがそれぞれ標本として比較される。すなわち，個体の集合ではなく，実験群・統制群という特定の状態における反応の集合が母集団として想定されるので，実験群・統制群の個体的条件が均衡を保つようにするために，被験個体を両群に無作為に配分することが必要であるとしても，被験個体そのものを無作為に抽出することは必ずしも必要ではない(牧野, 1973, p.11～12)”と述べられている。

個体の集合と考える理由　心理学実験実習などで経験する事柄として，感覚のような基本的な心的過程では個人差は少ないものである。これは感覚実験で，実験者が操作する，有機体のおかれている環境の側の条件（刺激変数（stimulus variable）と，性，年齢などの身体・生理的な要因，及び性格，動機，興味などの心理的要因という，実験者が自由に操作したり変化させたりすることが一般に困難な有機体側の条件（有機体変数（organismic variable）を比べた場合，後者が前者に与える影響はほとんどないということを意味している。したがって極端な場合，ただ一人の標本が母集団を代表するということも理論的実際的にはあり得ることになる。

今ある被験個体の持つあらゆる反応の集合体には，母集団としての，すべての被験個体の持っている反応がすべて含まれていると仮定し，この被験個体の持っている反応の集合体から無作為にある反応を抽出するとする。この抽出された反応をまたもとの集合体に返して再び無作為抽出を行う，といった行為をくり返していったならば，ある有限個の標本が得られることになる。したがって得られたこの標本をもとにして，母集団の性質を推定することが可能になるはずである。この仮定で重要なことはまず，無作為抽出が可能であるということ，次いで無作為抽出をくり返しても母集団の性質は変わらないということである。このような条件に近いのが感覚実験だということになる。

しかし感覚実験といえども現実はそうではなく，その日の身体的精神的状態や，実験に対するモチベーションによって左右される変動が無いとはいえない。このような変動による誤差を剰余変数（extraneous variable）として扱うために，ある程度の被験者数が必要になってくる。実験的方法で被験者を無作為に選ばなくてもよいとされる理由は，有機体変数が剰余変数の一部であるためであるが，実験群と統制群を比較するときにそれぞれの群内部での剰余変数の重みが異なることを防ぐために，両群に対象者を無作為的に配分するという方法をとるわけである。他方差異法では，一定の基準により被験個体あるいは被験個体群の有機体変数としての行動の差異をみるわけであるので，被験個体の持つ反応ではなく被験個体それ自体を無作為に抽出しなければならないことになる。

実験法的アプローチから差異法的アプローチへ　しかし実験法的アプローチと差異法的アプローチとで，対象者の選択がそれほど自覚的に行われてきたかと言えば必ずしもそうではなかった。たとえば眼瞼反射を用いた古典的条件づけは，強化，弁別，消去といった条件づけに関する基本的原理を示してくれる典型的な実験パラダイムである。したがって被験者の選択は，標本は被験個体の反応であるという原則に従えばよいことになる。事実，眼瞼条件づけパラダイムの実験では，被験者の選択については，条件づけの速度が内向性 — 外向性という向性次元と関係あるという Eysenck (1965) の提起があるまでは特に問題にはならなかった。条件づけの容易さと向性次元の関係については様々な結果が出てきたが，Eysenck & Levey (1972) の系統的な実験で，内向性者の方が外向性者よりも，条件づけが容易であることが示されるとそうはいかなくなってしまった。

向性次元と条件づけの容易性の関係を見る実験は，実験法ではあっても被験者の選択においては差異法の原理によらなければならない。つまり向性次元は有機体変数であるので，標本は明らかに被験個体である。実験パラダイムの変化によって，被験個体の個々の反応が標本で反応の集合が母集団という

想定から被験個体が標本で個体の集合が母集団という想定へと被験者の選択原理が変わってしまったことになる。言い換えるならばいわゆる古典的条件づけのパラダイムで，剰余変数の一部であると考えられていた有機体変数が実験変数となったのである。

実験法的アプローチと差異法的アプローチでの対象者のとらえ方の違いは理解できたとして，それでは差異法と近縁関係にあると一見考えられる個性記述的アプローチでは，対象者はどうとらえられているのだろうか。

6. 個性記述的アプローチにおける個人のとらえ方

法則定立的心理学的アプローチに反対する人たち，それは広い意味での個性記述的方法をとる人たちのなかにあるといえようが，かれらが非難する論拠としてよくでてくることとして，いわゆる自然科学的な方法からは生身の人間像，全体としての生きた人間像が出てこないということである。実験室に閉じこめて，日常生活とはかけ離れた単純な刺激を出し，これまた単純な反応をとって刺激と反応の関係を見，そのなかに潜んでいる精神過程を推定することから何が分かるかというわけである。呈示される課題を刺激と呼び，応答を反応と呼び，さらには人を「被験者」と呼ぶこと自体が問題視される。そのなかに人の主体性を無視したにおいがするというわけである。これが研究を客観的にしようとしたことの帰結であるとされる。

個体数＝1 がその特徴ではない　前節で，法則定立的アプローチのなかの実験心理学的アプローチでは，標本は被験個体そのものではなく，被験個体のもつ反応であると述べた。それでは個性記述的アプローチにおいては，標本はどのようなもので，母集団はどのようなものとなるのだろうか。先に紹介した心理学百科事典の「一般心理学」の項には，法則定立性と個性記述性を区別する基準として研究対象の母集団 (population) の大きさは必要なく，このことはとくに，N=1 の母集団を取り扱う際に明白である，と述べられている。ところが英語版の原典であると考えられる Lexikon der Psychologie では，母集団の語の代わりに（抽出された）標本 (Stichprobe) の語が当てられている。このような食い違いの原因としては，英語とドイツ語の間に完全に一致する対訳がなかったことからきている部分のあることが認められるが，また同時に対象者の把握の違いというものの存在を示唆している。

つまり，母集団 N=1 の場合には，測定の対象と考えられているものすべてを含む集合が 1 であることを意味するが，標本 N=1 の場合には母集団から無作為抽出した対象者が 1 であるということである。母集団 N=1 であれば標本も N=1 であるので，両者とも同一ではないかと思われるかも知れないが，標本 N=1 という場合には母集団 N=1 であるとは限らず，逆は真ならずということになる。表現を変えるならば，母集団 N=1 の場合には当該の対象者のなかにすべてがあるという姿勢が感じられるが，標本 N=1 という場合にはたまたま遭遇した対象者であり，そこからその全体的な特徴を明らかにするという姿勢があるように感じられる。しかしこれは対象者に対する態度の問題であり，両者とも一人の人間を問題にしている点には変わりはない。しかし次に述べるように母集団にせよ標本にせよ，N=1 の N とは個体数のことであって，実際には個体の反応の集合が問題になるので厳密にいえば正しくない。

法則定立的対個性記述的アプローチの考えの違い　ここで N=1 の意味をあいまいなままにとらえるとして，法則定立的アプローチでも個性記述的アプローチの場合でも，N=1 のものがあり得るとすれば，両者を区別するものは何であろうか。すでに述べたように，法則定立的な実験心理学的アプローチでは，一個人のもっている反応体系全体のなかに可能性として，すべての人たちの持っている行動様式が含まれていると考えている。そして実験で取り上げたい反応をできるだけ独立した形で，また無作為的に後への影響を極力排除した形で取り出すことを心がけている。これがなるべく実現できるようにするために，実験的統制といわれている方法を採用するわけである。一個人のなかの，特定の反応体系の集合を母集団と考え，それらの反応を無作為的に多数回繰り返し抽出し，抽出の度ごとにもとの母集団のなかに戻してやるという作業を繰り返すのである。

これに対して個性記述的アプローチでは，一個人のもっているすべての反応体系の集合を母集団と考える。あるいはすべてとはいわないまで，多数の反応体系の集合を考える。したがってそれぞれの反応

体系の独立性というものはあり得ず，交互作用の存在を前提にしている。またその交互作用にも様々なものがあり得ることになる。この交互作用の存在をうまく利用して，特に取り上げたい反応体系を浮き立たせることが可能となる。治療場面においては，治療者の現象のなかへの参加が，これらの交互作用に多様な影響を与えることになる。治療者が望む反応体系を浮き立たせるためには，他の反応体系とのかかわりの姿を知るためには，他方では観察者でなければならない。河合（1975）のいう“治療者は，現象のなかに参加するものでありながら，一方では観察者でなければならない（p.213）”というこのような矛盾の存在とはこのようなことであろう。

個性記述的アプローチにおいては，当該の対象者の心的特徴の現実的な姿を明らかにすることをその第一の目的としている。治療的場面においても，このようなアプローチが有効であると考えられている。しかし当該の対象者についての個性記述が多面的で客観的であればあるほど，それは個性の記述にとどまらず，一般化への道を進むことになるのである。

7. 差異心理学的アプローチにおける対象者

次にこれまで述べてこられなかった，通常的には不問のままに自明と考えられている，標本の考え方と関係した差異心理学的アプローチについて検討してみたい。すでに述べたように，差異心理学的アプローチにおいては，母集団は対象者の集合であり反応の集合ではない。したがってそこでは標本抽出の方法が特に問題とされる。特に問題が明確になるのは国際比較的研究においてである。

木下の国際比較研究での対象者の選択　木下（1998）は「国際比較調査の悩み」のなかで，多くの国際比較調査で明確にしなければならない母集団のあり方に関して，次のような問題のあることを指摘している。まず国際比較といえばすぐアメリカとの比較がでてくるが，なぜアメリカでなければならないのかが明らかにされなければならない。次にアメリカを対象国の一つに選んだとしても，アメリカ文化のどのような側面を取り上げようとするのかが問題となる。木下はこれを文化圏の「因数分解」と呼び，因数分解の結果との照合が重要であるとしている。さらには，2国間比較では文化差の解釈は相対的になってしまうので，比較における恣意性を少なくするためには，“比喩的に表現すると，天秤の両端の皿に比較すべき2ヶ国を乗せ，今一つの国を支点にして，皿の軽重を比較する方法”である，文化の3点比較の重要性を強調している。つまり“日米の2ヶ国比較だけでは多義的で解釈しにくかった文化差が，第3国を支点とすることによってコントロールされ，文化の背景要因が明確になるということである”（木下，1998，p.2）。

木下が行う日米中比較では，大阪，ロサンゼルス，北京がよく選ばれているそうであるが，これは調査コストの制約もさることながら，日本に比べるとアメリカや中国の国内分散がはるかに大きく，どの地点を選ぶかによって結果が大きく左右されることから，“それぞれの文化圏を通じて似た性質を持つ地域を選定することが多い”ことからきているという。それでは“それぞれの文化圏を通じて似た性質を持つ地域”からはどのような母集団が想定されているのだろうか。

母集団とは　母集団（population）とは，“実験者や調査する人が研究問題としている属性（標識）をもつすべての個体の集まり”であり，“研究者がこの母集団からなんの作為もなく抽出した対象の集まりを標本（sample）という（岩原，1957，p.148）”。また牧野（1973）によると，研究者は“実験の結果得られるものは，つねに標本としての結果であることを考え，標本から母集団（一般法則）を推測することを考えなければならない（p.10）”としている。両者の定義からは，母集団一般というものはなく，研究問題（課題）と結びついたものであり，また母集団は研究課題の目指す一般法則を示すものだということになる。

先に挙げた木下の日米中比較で，大阪，ロサンゼルス，北京が用いられるのは，日米中が共通して持つ「ある」属性を共通して持っていると考えられるからであり，そこから「ある」属性に関する一般法則がそれぞれの母集団から得られることが期待されるからである。ここでいうある属性とは，性格学（後述）でいう類型（type）あるいは理想型（Idealtypus）に対応するのではないかと考えられる。ここで性格学をもちだしたのは，類型論の背景にある考えを検討することによって，母集団とは何かという課題が検討しやすくなるのではないかと考えたからであ

る。またこのことが同時に，心理学百科事典での応用心理学の定義にでてきた性格学とは何か，またなぜいま性格学なのかという問に答えることになるからである。

8. 応用心理学における性格類型論的発想

性格類型論あるいは類型論とは，性格学といわれる主にドイツ語圏で20世紀前半に栄えた理論（これらの考えについてはローラッヘル（1966）を参照のこと）の特徴をこのように呼んだことからきている。しかし現在では類型論は否定的にとらえられる傾向が強い。

一般的な理解　たとえば性格学にくわしい詫摩（1978，心理学小辞典；1991，教育心理学小辞典）も，類型論を“一定の原理にもとづいて典型的な性格を設定し，それによって多様な性格を整理し，分類して，性格の理解を容易にしようとする立場”と規定した後に，“性格を直観的に理解するのに便利であるが，中間型が無視されやすく，また性格を固定的にみてしまって，その形成過程における環境的要因を過小視する傾向がある。20世紀前半のドイツにおいて著しく発展した性格論である（教育心理学小辞典）”としている。

他方心理学百科事典では，“性格学は広義には，人が自然的素質（disposition, Anlage）をどのように発達，特殊化，補償し，それに反応するかというその方法を取り扱う（L. Klages）。その理論的基礎には層モデル（P. Lersch; A. Wellek）があり”，“狭義のものとしてとりわけドイツ語圏ではじめに発達したものをいう”とあり，性格学の定義のなかには類型論はでてこない。類型論は性格學の一側面をあらわすにすぎず，しかも誤ってとらえられていた。その正しい理解のためには，ローラッヘル（1966）による次のような検討は大いに参考となる。

類型体系とは，たとえばクレッチマーの分類で“「細長型」と呼ぶのは，すべての細長者がわけもつ特徴 — つまり，背が高く・やせて・扁平で・肉がうすい，など — をとくに目だってそなえている人のことである”とした上で，“しかし，それとならんでさらに，科学的な類型 — 分類の基礎をなす理論的な類型 — 概念もある（p.33）”と述べ，細長型のような少なくとも実際的なことばの使用面と理論的な類型概念を区別している。

理論的類型としての理想的類型“ある類型体系をうち立てる場合には，はっきりした色分けができるように，純粋なまたは「理想的な」類型から出発する。すなわち，類型のすべての特徴的性質を著しくもち，そしてこれらの性質だけを示す（したがってほかの類型の性質を何一つ示さぬ）人間が描かれる。だが，こういう人間は現実にはあまりいない。そのため，この理論的類型の場合には，はっきりと記載するために，すべての特徴的性質から「合成」して理想例を作り上げなければならない。したがって，こう要約することができる。理論的には，「類型」とはその集団のすべての特徴的標識をそしてそれだけをもつ人間の人工的な理想例のことである。実際的には「類型」はその集団の特徴的な標識をとくに多くそしてはっきりと示す人間のことである（p.33）”と。つまり類型とは理想例のことであった。

しかし類型の考え方がアメリカに輸入されると，「人間の人工的な理想例」をつくろうとする研究者の思考過程であるというその側面が無視され，分類基準として固定的に用いられてしまうようになる。Stagner（1948）は著書「パーソナリティの心理学」のなかで，性格類型論から特性論への移行が科学的心理学の発展とおおむね平行しているとしているが，これがアメリカ及び日本に定着している性格学の評価であろうと思える（類型論と特性論の対比についての一考察が，大村（2000）によりなされているので参照のこと）。しかし科学的心理学といわれていることのなかには，質的なものを量的なものへ変換する道を発見することが科学の進歩であるという，数量化万能主義がその背景にあることは否めない事実である。ドイツ性格学にみられる哲学的，人間学的考察の意義がどこかに飛んでしまっている。これは大村（2000）も嘆くように，アメリカ的な操作万能主義の結果であるといえるかも知れない。しかし性格学で提示された理想類型の概念は現代的知見に照らしても示唆に富むものであって，大脳のはたらきの二分法のなかに位置づけできるものが多い（坂野，1995）。

ここで，ローラッヘルの述べた理想（理念）型（Idealtypus）という概念は，もともとマックス・ウェーバーが用いた用語であって，“それは一つの純粋に理想的な極限概念に意味をもつのであり，わ

れわれはそれによって実在を測定し，比較し，もってその経験内容のうちの，一定の意義ある部分を明瞭にする”ものである（粟田・古在，1958）。

そこで，先に挙げた日米中の国際比較を大阪，ロサンゼルス，北京で行うに至った過程を想像してみよう。それはこれまでの3国の国際比較の結果から操作的に導き出された結論であると同時に，「ある群の持つ特徴をそれだけ純粋に持つ都市がどこであるか思索抽象化した」結果であるというように，理想型を想定した思考過程を同時に伴ったものであるということができるであろう。つまり思考過程からの演繹と資料の分析からの帰納という二つの道を経過して，この研究は成立たものと考えることができるのである。

理想型的構想による坂野の研究　坂野（1982, 1995）は理想型を考えて分析に着手するというこのアイディアを，次の研究のなかで積極的に活用している。Pavlovのアイディアに基づいた思索家・芸術家型認知様式質問紙（伊田・坂野，1988）と，利き脳の仕組みと関係することが示唆された潜在的利き手の関係について，様々な大学での男女学生を用いて調査を行っていくと，大学によって学部によって，あるいは男女によって，予想された統計的に有意な結果が出たり出なかったりという結果であった。これまでの常識的な統計的推定の原則からは，このような結果は信頼できないことになる。ところが資料をくわしく検討した結果，ある原理で資料全体を眺めてみるとそこに法則性のあることがわかってきた。この原理とは，研究目的にとって理想型に近いと考えられる対象者を用いた研究ではすべて予想通りの有意な結果が得られ，しかも異なった研究パラダイムで得られた，異なった結果の間には論理的な矛盾がないということであった。

そこで理想型的な標本を用いたこれらの調査結果を，男女大学生それぞれについての無作為抽出に近いと考えられる大規模な（それぞれ2000名以上）標本と比較してみると，理系・文系差，男女差という基本的な傾向を大規模標本があらわすが，それらを理想化し具体化した場面においては，意図的に選択された標本がより明瞭で具体的な形でその差異を明らかにしているということがわかったのである。

理想型から出発することの意味　統計的有意性の問題については，大村（2000）は，“+.25というような相関は風前の塵のような係数ではあるが，ρ=0という帰無仮説がp<.05で棄却されるということだけの話なのであり，+.25という相関が，2つの事象の積極的な関係を保証しているわけではない（p.5）”と，統計的検定の乱用を戒めている。これは確かに正論ではあるが，理想型に近い標本で高い相関が得られ，理想型に近づけばそれだけ相関が高くなるという結果が示されるならば，大規模な標本で得られた「風前の塵」のような相関であっても，それが理想型からほど遠い標本であったため，剰余変数のコントロールがうまくできていないことからきていると考えれば，「風前の塵」にもそれなりの理由があるわけで，その背景に積極的な関係のあることをうかがうことができるのである。

Sakano（1999）はまた，坂野が開発した多次元適性検査システム（三洋HRS株式会社，インターネットホームページ参照）を標準化する際に，ある大手電機メーカーの社員を対象に調査を行い，因子分析的検討を行った際に，職種，学歴，年齢によって因子構造が異なるという結果を得た。そこでどの標本による因子分析結果に基づき，下位検査の妥当性を確かめるべきかについて種々検討したが，結論的には他の集団と比べて，それぞれの下位検査においてもっとも特徴を示すと考えられる集団を理想型と考え，その集団での因子構造を適性検査の基本形として用いるのがもっとも妥当であるという結論に達したのである。

このようにして，理想型と想定した集団についての調査結果を，より規模の大きい無作為抽出の標本での調査と比較検討し，両者の関係を見ることは非常に意味のあることのように思われる。理想型的構想から発した研究はその演繹的方向により枝葉を広げていき，無作為的抽出の構想から発した研究はその帰納的方向により，問題を収斂させるのである。

9. 応用心理学研究掲載論文を通してのモデルの検討

応用心理学においては，一般心理学と差異心理学とがその基礎として関わっているという本論での論議に従って，これまで応用心理学の研究をめぐる諸問題について考察を行ってきた。応用心理学の基礎的研究の一般心理学的アプローチでは，対象者は一定の反応の集合体として見られるのに対して，差異

心理学的アプローチでは，対象者は個体として（類型論的あるいは特性論的アプローチ）あるいはあらゆる反応の集合体として（個性記述的アプローチ）として見なされることを指摘した。さらにはすべてのアプローチにおいて，対象者の数がアプローチの方法を定めるものではないことも指摘しておいた。“心理学的知見と研究の，生活のニーズより生じている課題への適用である”応用心理学の具体的な課題では，対象者についての考えはどのように変化するであろうか。

まずTable 1に応用心理学の方法と対象についてのこれまでの論議のまとめを示しておいた。次にこの表をもとにして，応用心理学研究から任意の論文を抜き出し，坂野のモデルをもとに具体的に検討してみたい（Table 2，Table 3参照）。なお本論で取り上げた以下に示す2編の論文は，モデルを検討するために選ばれたものであってそれ以上の理由はない。

越智の研究　応用心理学の基礎的研究の一般心理学的アプローチとして選ばれたのは，応用心理学研究，1997年，No.22 (1) に掲載されている，越智（1997）「テキスト再生における順行・逆行検索方略の効果 ― 目撃者のインタビューへの応用 ― 」である。この研究では目撃者の証言の信頼性についての基礎的資料を得るために，「歯医者にいく」スクリプトをもとに作成したテキストを用いて実験が行われた。順行検索と逆行検索の組み合わせにより検索方略が，歯医者にいくときに典型的に起こる出来事であるかどうかという典型 ― 非典型項目が操作され，正再生項目数を指標にして分析が行われた。被験者は大学生，大学院生，会社員56名，平均年齢22.0歳であり，14人ずつ4群に分けて実験が行われた。

以上のようにこの研究での手続きは，一般心理学の典型的な実験計画法によるものである。会社員が用いられているのは，著者が科学捜査研究所に勤務していると事情を考慮すれば理解できることであって，無作為抽出をした結果でないことは明らかである。つまりこの研究では，対象者の記憶に関係した反応の集合が母集団であるということになる（Table 2の左側）。

Table 3の左側の一般心理学的アプローチで示されているのは，あくまでも架空の事態として設定されたものである。しかしこのようなアプローチが将来可能であることは，越智（1997）の論文のなかの，

Table 1　応用心理学の方法と対象

応用心理学の領域		
その基礎	一般心理学	広義のパーソナリティ・アセスメント
目　的	一般的法則性の確立	特殊的法則性の確立
方　法　Windelband	法則定立的	法則定立的　個性記述的
Dilthey	自然科学	自然科学　精神科学
現代心理学	一般心理学	差異心理学　臨床心理学
対　象　母集団，標本	反応の集合	個体の集合　反応の集合
共通の目的	心理学的知見と研究の，生活のニーズより生じている課題への適用	

Table 2　応用心理学研究における基礎的研究での問題のとらえ方（2つの研究の分類）

応用心理学の基礎的研究におけるとらえ方		
	一般心理学的アプローチ	パーソナリティ・アセスメント的アプローチ
目　的	一般法則性の確立	特殊法則性の確立
適用例	テキスト再生検索方略の効果（越智, 1997）	絶望感尺度の作成（林・滝本, 1996）
母集団	対象の目的とする反応の集合	目的とする対象個体の集合
標　本	無作為抽出された反応	無作為抽出された個体
対象者数	$N \geqq 1$	多数
対象者のとらえ方	相対的とらえ方	相対的とらえ方

Table 3　応用心理学研究の具体的な適用場面での問題のとらえ方（仮定的な適用例）

応用心理学の具体的適用場面でのとらえ方		
	一般心理学的アプローチ	パーソナリティ・アセスメント的アプローチ
目　的	一般的法則性の確立	個別的法則性の確立
適用例	目撃者のインタビュー（仮定）	認知行動療法における診断（仮定）
母集団	対象者の持つ特定の反応の集合	対象者の持つすべての反応の集合
標　本	作為的に抽出された反応	作為的に抽出された反応
対象者数	$N \geqq 1$	$N \geqq 1$
対象者のとらえ方	絶対的とらえ方から一般的とらえ方へ	絶対的とらえ方

次の結びからうかがうことができる。“今後は，実際の犯罪状況に於いては，はたして同様な効果が得られるのかといったような点についても引き続いて検討していくことが必要であろう（p.13）”。しかし逆行検索によって非典型項目をより多く再生させることができるという結果は，越智のいうように，“実際，証言としての価値は非典型項目のほうが高いことが多いにもかかわらず，通常の目撃証言聴取が基本的には非典型項目再生には最低の方法である反復順行検索で行われることを考えると，逆行検索を目撃証言聴取事態に組み入れることは証言聴取において有効な方法の一つになる可能性を持っていると言えるであろう（p.13）”。

将来目撃者の証言において，逆行再生の方法がとられたとした場合，目撃者のもつ目撃という事態と，直接的間接的に関連した特定の反応が母集団であり，逆行再生という意図的な方法で抽出された反応を標本として，判断が行われることになる。ここでいう間接的な関連事項とは，たとえば目撃者のパーソナリティ的要因も場合によれば加味しなければならず，そうなると右側にパーソナリティ・アセスメントの領域とクロスすることになる。この2つのアプローチが母集団，標本，対象者数，対象者のとらえ方が同一であることに注目されたい。

林・滝本の研究　次に，応用心理学研究，1996, No.21 に掲載の，林・滝本（1996）「認知行動療法における臨床的評価の一つとしての絶望感についての一考察」を取り上げてみたい。本研究では，絶望感尺度，抑うつインベントリー，自己有効性尺度の3尺度，計57項目を用いて，首都圏の大学の学生，男子204人，女子159人，計363人に実施された。これは典型的なパーソナリティ・アセスメントの方法である。従って母集団は目的とする対象個体の集合であり，そこから無作為抽出された個体が363人ということになる（Table 2 の右側）。

“本報告では，1：絶望感と抑うつ傾向とは関連するであろう，2：絶望感と自己有効性とは関連するであろうという2つの仮説（p.53）”が設定され，“これらの仮説について，認知行動療法において用いられる絶望感尺度を用いて検討すること（p.53）”が目的とされた。つまり林・滝本の研究では，認知行動療法場面で，抑うつの認知的成分査定の一つとして用いられる絶望感尺度について，心理測定的により深く検討することを通して絶望感尺度を臨床的により深く理解しようとするところにあるといえよう。

このような観点から絶望感尺度を臨床診断の場に適用してみると，Table 3 の右に示すようなことがいえるのではないだろうか。いまある対象者に絶望感尺度を施行して結果を得たとする。そこで得られたものは，当該の対象者のもっているすべての反応の集合（母集団）から，絶望感尺度によって意図的に抽出された反応（標本）であると考えることができる。認知行動療法では，母集団のなかでこの標本をどのように位置づけるかが重要な課題となるのではないだろうか。

ここで Table 3 の一般心理学的アプローチとパーソナリティ・アセスメント的アプローチでの方向性の違いに注目したい。表に示された二つのアプローチの項目での違いは，母集団についての考えの違いである。一般心理学的アプローチでは，対象者の持つ「特定」の反応の集合が問題となる。もちろんこのすでに述べたように，特定とはいっても，対象者のパーソナリティ特性や目撃自体の状況などを考慮した上でのものであることはいうまでもない。しかし最終的な眼は目撃者の「記憶」という事態に向けられている。またそれは特的の目撃者の記憶であっても，その証言の信頼性にまで言及されると，これはその目撃者の記憶という特殊性にとどまらず，そのような事態における記憶の問題というように一般化されていくのである。

これに対してパーソナリティ・アセスメント的アプローチである認知行動療法における絶望感尺度の利用は，対象者の持つ「すべての」反応のなかから絶望感という特定の反応を抽出したものであって，最終的には治療者の眼は対象者の持つすべての反応体系へと向けられるのである。つまり研究者 — 治療者の眼はあくまでも当該の対象者一個人へと向かうものであって，そこから一般化への道をとるかどうかは副次的な問題となるのである。

10. 結　語

これまで応用心理学の方法と対象について考察してきたが，そこでの論議は何も応用心理学に限った問題ではない。坂野（1988）はすでに簡単ではあるが，教育心理学の方法と対象について大筋においては類

似した論議を展開してきた。それでは応用心理学独自の方法と対象は存在するのだろうか。それはまず，応用心理学の範囲をどのように限定するかという問題と関連している。もし心理学百科事典（Arnold, Eysenck und Meili, 1971; Eysenck, Arnold & Meili, 1972）の定義にあるように，応用心理学が“心理学的知見と研究の，生活のニーズより生じている課題への適用”であるとするならば，教育心理学も社会心理学もそのなかに包含されてしまうことになる。

しかし三宅（1991）も述べているように，“教育心理学や発達心理学などを応用的と片付けてしまうのは正しくなく，独自の体系を構築しているのである”。かりに広義の応用心理学のなかに教育心理学や発達心理学などが含まれるとしても，それはこれらの学問体系の独自性を否定するものではなく，むしろ応用心理学ではこれらの学問体系を包摂したような方法と対象が設定されなければならないことを意味している。このことが応用心理学をして，わかったようでわからない学問という印象をもたせる原因となっていることは否めない。しかし応用心理学では，教育心理学や発達心理学，あるいは社会心理学などの，“生活のニーズより生じている課題”を解決するための諸々の心理学に共通した課題を解決するために存在する学問であると考えるならば，本論で行った論議が教育心理学にも適用できるものであったことが理解されることとなるであろう。

引用文献

Allport, G. W. 1937 *Personality: a psychological interpretation*. New York: Holt, Rinehart and Winson.

Arnold, W., Eysenck, H. J., U. Meili, R. (Hg.) 1971 *Lexikon der Psychologie*. Freiburg: Herder.

粟田賢三・古在由重（編） 1958 岩波小辞典 哲学 岩波書店.

Chaplin, J. R. 1968 *Dictionary of psychology*. New York: Dell.

Dilthey, W. 1883 *Einleitung in die Geistwissenschaften. Gesammelte Schriften*, Bd. 4. Stuttgart.

Eysenck, H. J., Arnold. W. J., & Meili, R. 1972 *Encyclopedia of psychology*. Search Press.

Eysenck, H. J. 1965 Extraversion and the acquisition of eyeblink and GSR conditioned responses. *Psychological Bulletin*, **63**, 258-270.

Eysenck, H. J., & Levey, A. 1972 Conditioning, introversion-extraversion and the strength of the nervous system. In V. D. Nebliysyn and J. A. Gray (Eds.) *Biological bases of individual behavior*. New York: Academic Press.

G. W. オールポート（今田恵監訳） 1968 人格心理学 上 誠信書房.

林 潔・滝本孝雄 1996 認知行動療法における臨床的評価の一つとしての絶望感についての一考察 応用心理学研究，**21**，51-58.

伊田行秀・坂野 登 1988 思索・芸術家型認知様式質問紙作成の試み 教育心理学研究，**36**，51-56.

岩原信九郎 1967 教育と心理のための推計学 日本文化科学社.

Jaspers, K. 1913 *Allgemeine Psychopathologie*. Springer. 内村祐之他（訳） 1953-56（1948年刊，第5版） 精神病理学総論，上・中・下，岩波書店.

河合隼雄 1975 精神分析的方法 八木 冕（編） 心理学研究法1 方法論 東大出版会.

木下冨雄 1998 国際比較の悩み 中央調査報 No.492. 1-4.

北村晴朗（編） 1978 心理学小辞典 協同出版.

牧野達郎 1973 大山 正（編） 心理学研究法2 実験1 第1章 実験の計画 東京大学出版会.

三宅和夫 1991 応用心理学 三宅和夫・北尾倫彦・小嶋秀夫（編） 1991 教育心理学小辞典 有斐閣.

村上英治 1974 心理学研究法としての臨床診断 村上英治（編） 心理学研究法12 臨床診断 東大出版会

日本応用心理学会（編） 1998 日本応用心理学会史 — 学会活動の変遷・回顧と展望 日本応用心理学会.

荻野恒一 1975 現象学的方法 八木 冕（編） 心理学研究法1 方法論 東大出版会.

大村政男 2000 応用心理学の研究におけるアナクロニズムとシンクロニズム 応用心理学研究，**26**，1-12.

越智啓太 1997 テキスト再生における順行・逆行検索方略の効果 — 目撃者のインタビューへの応用 応用心理学研究，**22**，9-14.

ルリヤ（天野清訳） 1983 偉大な記憶力の物語 — ある記憶術者の精神生活 — 文一総合出版.

ローラッヘル（宮本忠雄訳） 1966 性格学入門 みすず書房.

相良守次 1981 心理学 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田 新（監） 新版心理学事典 平凡社.

佐治守夫 1968 心理療法（1） 井村恒郎ほか（編） 心理療法 異常心理学講座 第3巻 みすず書房.

坂野 登 1982 かくれた左利きと右脳 青木書店.

坂野 登 1986 こころの構造 青木書店.

坂野 登 1988 教育心理学の方法と対象 伊藤隆二・坂野 登・鑪幹八郎（編） 教育心理学を学ぶ（新版） 有斐閣.

坂野　登　1995　ヒトはなぜ指を組むのか ― 脳とこころのメカニズム　青木書店.

坂野　登　1997　思考における二重の過程について　京都大学教育学部紀要, **43**, 1-12.

Sakano, N. 1999 Effect of age, academic background & job type on cognitive ability & cognitive style of Japanese male employees. In: *Social and psychological change of Japan and Germany.* Proceedings of the 5th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences. Waseda University Press, pp.303-314.

坂野　登　2001　心理学研究における標本と母集団の選択をめぐる諸問題　神戸親和女子大学研究論叢 **34**, 1-14.

三洋 HRS 株式会社　ホームページ.

佐々木正宏　1999　応用心理学　恩田　彰・伊藤隆二（編）臨床心理学辞典　八千代出版.

園原太郎・柿崎祐一・本吉良治（監）1971　心理学辞典　ミネルヴァ書房.

Stagner, E. 1948 *Psychology of personality*. New York: McGraw-Hill.

田畑　治　1975　心理療法　八木　冕（編）心理学研究法 1　方法論　東大出版会.

滝沢武久　1978　応用心理学　大山　正・藤永　保・吉田正昭（編）心理学小辞典　有斐閣.

トーマス・クーン（中山茂訳）1971　科学革命の構造　みすず書房.

Windelband, W. 1904 Geschichte und Naturwissenschaft. In: R. Eisler, *Wörterbuch der philosophischen Begriffe.* Berlin: Mittler.

矢田部達郎　1950　心理学序説　創元社.

矢田部達郎　1957　心理学　梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新（編）心理学事典　平凡社.